

支部長

同

同

同

支部長代理

副支部長

同

同

同

同

同

同

帝國在郷軍人會平野郷分會

分會長

同副長

同副長

木谷久吉

中尾貞次郎

古川徳松

松村松三郎

大黒貞三

播野力造

久保吉次郎

柿谷太三郎

梶野嘉三

京治一郎

大澤四郎

魚谷太三郎

服部清三郎

中田福三郎

新川吉松

鹽川豊次郎

理事

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

津田愛之助

八阪永吉

小松幸之助

菊崎安次郎

吉年清一郎

澤田力造

田見徳松

大森安太郎

長尾庄次郎

柳伊太郎

濱村末藏

鹽谷末吉

粕谷市次郎

岩井松次郎

藤田源吉

工藤市藏

平野郷普通水利組合

管理者

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

町行政關係氏名

吉村音次郎

多治見秀徳

戎井新助

鍛冶幾治郎

石田太三郎

福井楠多郎

奥村富三郎

播野力造

高田慶三

藤岡庄次郎

石戸英二

吉村萬治郎

古川藤吉

信田源次郎

里山喜一郎

松田忠一

油井安治郎

組合會議員

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

平野郷公益會

會長

武村吉太郎

吉村音次郎

藤井常治郎

柿谷徳松

米澤松治郎

粕谷佐一郎

安田木三

末廣元治郎

多治見秀徳

柿谷徳松

吉村萬治郎

里山喜一郎

石田太三郎

粕谷佐一郎

油井安治郎

吉村音次郎

副會長
理事

末吉平三郎
石戸英二
播野力造
森本定次郎
久堀忠義
武村吉太郎
鹽川德太郎
山口吉治郎
多治見秀徳
田中良吉
石川虎之進
鈴木好雄
中桐彦太郎
鹽川德太郎
中田福三郎
松本龜三郎
西田久彌
鶴池鹿藏

評議員

藤岡庄次郎
金野太三郎
油井安治郎
粕谷佐一
吉村晋次郎
末吉平三郎
藪内政一
播野力造
大黒貞三
鍛治幾治郎
森本定次郎
吉井秀太郎
石戸英二
吉川龜藏
梶野嘉三
池峯長之助
岩井岩次郎
三好芳之助

評議員

柳巳之助
粕谷舜哉
石谷貞藏
久堀忠義
古川德松
酒井龜吉
秋月猛一郎
森才兵衛
我井新助
篠原師英
小吹末吉
井上日吉
瓦谷茂三郎
武村吉太郎
山口吉治郎
杉山廣吉
富永市太郎
山口貞之助

評議員

新家辰次郎
松村松三郎
鎌田次三郎
田中良吉
安田木三
粕谷惣次郎
石田太三郎
朽木省一
末廣元治郎
綱福松
多治見秀徳
堀内熊吉

平野郷町外六ヶ町村學校組合
組合町村長
平野郷町長 吉村晋次郎
北百濟村長 川上豊吉
南百濟村長 作本宗次郎

喜連村長 服部貞次郎
 田邊町長 橋 與一
 加美村長 中西峯三郎
 巽村長 石川虎之進
 助 役 末吉 増孝
 收入 役 井上 日吉
 組合議員 寺田 晉治郎
 同 辻田 松太郎
 同 辻野 爲次郎
 同 松本 幸太郎
 同 吉村 晉次郎
 同 松本 治三郎
 同 服部 貞次郎
 同 南 孝五郎
 同 桑野 秀松
 同 橋 尙藏
 同 奥村 富三郎

組合議員 安田 木三
 同 橋本 巳之助
 同 玉野 直次郎
 同 澤田 福三郎
 同 山野 俊三郎
 同 秋月 猛一郎
 同 下村 庄太郎
 同 山田 久治郎
 同 中谷 麟他良
 同 多治 見秀徳
 同 平川 慶次郎
 同 樋口 治郎吉
 同 川上 豊吉
 同 石戸 英二郎
 同 浦野 馬次郎
 同 奥田 富太郎
 同 佐々木 常三郎
 同 木村 定太郎

校 醫 篠原 師英

平野郷町外四ヶ町村組合
 組合町村長

管理者 平野郷町長 吉村 晋次郎
 北百濟村長 川上 豊吉
 南百濟村長 作本 宗次郎
 喜連村長 服部 貞次郎
 田邊町長 橋 與一
 助 役 石川 虎之進
 收入 役 末吉 増孝
 組合議員 多治 見秀徳
 同 辻田 松太郎
 同 吉川 龜藏
 同 戎井 新助
 同 新家 辰次郎
 同 辻野 爲次郎
 同 松本 幸太郎

町行政關係氏名

組合議員

同 玉野 直次郎
 同 山口 貞之助
 同 武村 吉太郎
 同 關口 彌三郎
 同 澤田 福三郎
 同 中辻 幸治郎
 同 木村 定太郎
 同 北本 豊次郎
 同 浦野 馬次郎
 同 橋 尙藏
 同 樋口 治郎吉
 同 川西 重一
 同 服部 貞次郎
 同 佐々木 常三郎
 同 和智 勇三

平野郷町外二ヶ町村組合
 組合町村長

四五三

囑託 醫

(附
録)

長寶寺よみかへりの草紙

此の國に於ては平野のすまき寺

よみかへりのさう番事

永享十一年六月六日心ち大事になり、そこへおちいるやうにかなしく候を、おちじとすれば、ひたりみき
のたもとにいしなといれたるやうにおもくそこへひきいれ、くらきと此世のしんのやみなをあかし、かう
べのうちなりまはり、大かせのふくやうなり、ちからもなくかなしく候ところに、をにふたりきたりてい
ふやうは、われはゑんまのつかい牛頭馬頭といふものなり、人のしするところへゆきたましるをぬきとる、
まなこのおそろしさいふはかりなし、おにのいろはあおくあかきなり、つめなかくまなこは月日のことし、
せいなたかさは人のせい三つがけなり、くろがねのしもとをもち、ひだりみぎにたちむかひきたてんと
す、おそろしさをなせんとせんかたなく一候ところへ、ふどろの御いり候て、かのをにともを御しかり候、
なんぢらがいろはん物にてはなしのけとて、けんをもちふとう御かへり候、くらきところをたゝひとりあ
しにまかせてやをつくやうにあゆみゆき候へは、あとにてよひ候こゑかすかにきこへ、もとりたくてかな
しさに中へ申はかりに候はす候、かへらんとすれば一あしもあとへはもとらす、さきへならてはあゆまれ
す候、はだしにてゆけばいわがんせきあたり、かなしさとへんかたなし、人のなきかなしむこゑあまた
きこへてめには見えず、なをすさましく候ところに、たれくるゝともなくてにつえさはり候ほとに、さぐ
りとりてみれば、くまのへまいりしときのこんがうづえとおぼしくて候、ふしきやな、わがこんがうつゑ
をは人のようにたてしが、わが又ようにたちけるよと一思ひ、うれしくてくらき道のたよりとなり候、は

此草紙は長寶寺の尼慶心が自ら蘇生
の次第を書きつゞつたもので、原本
は戦亂に失つたから、縁者の法印政
恵が、永正十年八月に、天王寺の東
僧坊中院で書寫したものである。今
は卷子に仕立てであるが、本は冊子で
一枚は十八行となつて居つた。

つこの國かけのこうり平野のてうはう寺

よみかへりのさう番事

濁點は後
にうちし
ものさ見
ゆ

一印、一
枚目のし
るし

永享十一年六月六日心ち大事になり、そこへおちいるやうにかなしく候を、おちじとすれば、ひたりみき
のたもとにいしなといれたるやうにおもくそこへひきいれ、くらきと此世のしんのやみなをあかし、かう
べのうちなりまはり、大かせのふくやうなり、ちからもなくかなしく候ところに、をにふたりきたりてい
ふやうは、われはゑんまのつかい牛頭馬頭といふものなり、人のしするところへゆきたましるをぬきとる、
まなこのおそろしさいふはかりなし、おにのいろはあおくあかきなり、つめなかくまなこは月日のことし、
せいなたかさは人のせい三つがけなり、くろがねのしもとをもち、ひだりみぎにたちむかひきたてんと
す、おそろしさをなせんとせんかたなく一候ところへ、ふどろの御いり候て、かのをにともを御しかり候、
なんぢらがいろはん物にてはなしのけとて、けんをもちふとう御かへり候、くらきところをたゝひとりあ
しにまかせてやをつくやうにあゆみゆき候へは、あとにてよひ候こゑかすかにきこへ、もとりたくてかな
しさに中へ申はかりに候はす候、かへらんとすれば一あしもあとへはもとらす、さきへならてはあゆまれ
す候、はだしにてゆけばいわがんせきあたり、かなしさとへんかたなし、人のなきかなしむこゑあまた
きこへてめには見えず、なをすさましく候ところに、たれくるゝともなくてにつえさはり候ほとに、さぐ
りとりてみれば、くまのへまいりしときのこんがうづえとおぼしくて候、ふしきやな、わがこんがうつゑ
をは人のようにたてしが、わが又ようにたちけるよと一思ひ、うれしくてくらき道のたよりとなり候、は

附録 長寶寺よみかへりの草紙

る／＼とやをつくことくみちのほと三里はかりゆき候て、あしのいたさいふはかりなく候ところへ、ひかりて物きたり候を見候へは、さきのふとう御いり候て、われをはたれと思ふ、なんちかしんかうする五大そのちうぞんなり、みちのすゑに七のつじあり、それにてまよはんするほとにきたりたり、なんちかあゆみ候やうにてはかなふまじ、此なわにとりつきてとおほせ候、ありかたく思ひて、御てにもちたまへるなわに、りやうのてにてとりつきまいらせてゆき候へは、あしのいたかりつるもなをり、あしもちにつかす、ちうをゆく心ちしてゆき候へは、せけんもよのあくるやうにすこしあかくなる、うれしくて見候へは、ひるのやうにはれやかになる、見れば松はらのはる／＼とをき木のむらなり、をと一する物とてはからすほとゝきすぬゑ三つのごゑして、なきつるゝこゑすさまじき事かきりなし、ゆきしもふり、さむさつめたさ、かぜも身にあたり候はとかりたる物にて身おつかるゝやうに候、さてこの松はらはる／＼ゆきすきて、おびたゝしき山あり、ふどうおほせ候は、あれに見えたる山こそしにて初七日にこゆるしでの山よ、なんちもあれをこえんすれども、わがみちびくにより此みちとほすぞとて、山をばひだりのかたに見て、ひろきみちをとをりて、しでの山を見れば、さいにんどもをおほくせめのほす、あしふみとむべきやうもなく、けはしき事かぎりなし、いわがんせきはつるぎのとく、とりつたへばみなきれやぶれ、こえかねておめきさげぶこゑに、ごくそつなをはらをたて、さん／＼になひもんす、ごくそつさいにんにむかい、ごくそつにたいなし、つくれるいんぐわのむくいなり、身をうらみよ、とてうちさへなむ、めん／＼につみをつくりしとのくやしさを、とさげびつるゝこゑ、千びきのうし一とにほふる吹ことくなり、お

(は)後の
傍書

にのもちたるくろかねのしもとにて、一うちうたるゝものは身のほねくたけて、あしのつまさきまでもた
まらずさけやぶれぬ、又おびたゞしき大かわ有、此かわこそ三つの大はかよとて見せ給ひ候、見ればこかね
あかゝねしろかねのはし三つあり、こかねのはしおほはとけたち御わたり候、あまりにたつとき人は此
しをわたり給ひ候、しろかねあかゝねのはしを善人御わたり候なり、こかねのはしのしたにはたゑなる
れんげひらけたり、なみもしつかにうつくしく見え候、はるかのおお見れば、くろかねのはし一あり、
ほそきかなぐさりなり、ごくそつどもさいにんを、此はしをせめつけて、わたれ／＼とせめ、さん／＼に
さへなむ、あまりにつよくせめられて、かなくさをわたらんとすれば、あしもたまらず、あしてにてと
りつきわたらんとすれば、はしのうへにほむらおひたゝしくもえとをり候、たまらではしにとりつき、あ
をのきになり候ありさま、くものいへ葉にむしのかゝりたることくなり、さいにんわたればかわのおもてあ
れわたり、なみのたかさ三十ぢやうばかりたちあがり、おちつるゝおと千万のいかつちのことし、きもた
ましいも身にそはす、おそろしさ中／＼申もおろかなり、そのなみまより大じやのつのかく見え、まな
こはてりかゝやく日月之とし、くちをあきつれ、さいにん一おちばのまんと、のたれあかるありさまたと
ゑんかたなし、なみのそこにはつるぎひまなくたてなればたり、さいにんどもつみばかりつくり、ぜんご
んをばせず、こうくわいするありさま、中／＼めもあてられず候、又此かわのはたにをにかたなるむ
ばあり、そはにびらんじゆといふたいほくあり、さいにんのかたびらどもこと／＼くはぎ、此木のえだに
かく、つみふかき物はかたびらおもくて、大なるえだ、ちにつくほどたはむなり、むばこれを見てなんぢ

(は)後の
傍書

がつみのおもさを見よとて、しやばにてつくりしつみとくくひたてないもんする、おそろしさかきりなし、それよりはだかにてなくくをり候なり、それよりはるかにひろきかはらをゆけは、おびたしき大門あり、そのうちへいりみれば、ひろきしらすのうつくしき申ばかりなし、なをおくへいりて見候へは、くうでんろうかくぢうくに、うつくしき大いりあり、そのうちに十わう一めんにならびて御いり候、なかにゑんまわう、すぐれておそろしく御見え候、御かほの大きさ三じやくばかりに御見え候、そのすへにひざまづきて候へは、ゑんまわう物おほせ候御こゑおそろしさなるかみのとく、一とおほせあれは、さもをけし心も身にそはず、かのゑんまの御まへにくしやうじんと申て、ぜんあくの二をしるし給ふぜんごんのふだおばこかねのふだに御かき候、ひたりのはうに御いり候、くしやうしんこかねのふたをもち給ひ候は、御かほもにうなんにうつくしく御いり候、みきのかたに御いり候くしやうじんは、御かほもおにのとくに御伊り候、くろがねのふだをもち、あくをしるし給ひ候、此くろかねのふだのまへに、人のかたちなるおにもおよくつといて、めんくにわれさきに申あげんと、こゑくに物をともきこえず、なにとなるらんと思ひ候へば、しやばにてつくるつみをことくく、めんくのたましいきたりて、ゑんまに申あくるこどものおそろしさとへんかたなし、さてゑんまわうおそろしき御こゑにておほせ候、いかになんぢはくまのへはまいりたるか、いつくへまいりて候とくありのまゝに申候へは、われもしるしたるぞとおほせ候て、なんぢかてらのほうぢやうをこれへよび申て、にんげん一さいしゆじやう見なつみならではつくらず、くとくけちゑんさらになし、さいけしゆつけにくをうくるありさまを見せ申し、

ぎやくしゆなんとすゝめさせ、けちゑんおほとこさせ申さんと思ひ、よばんとすれば、てらのほんそん五大そんよりしてわびさせ給ふやう、いまこれへほうぢやうをめされ候はん事、我々に御まかせ候へ、御しり候ことく、ことしはかのほうぢやう、おほきにたより、あやうしき事とも候いしかは、われくつけしめて候に、おとろきてかいふんきたうをし、われらにちんさいをなげ、きせいをし候ところに、これへめされて、もしかへり候はずは、此ほとのかきたうかいあるまじ、われくがきと申候まし、きたうにもめんぼく候、ましてぎやくしゆの事をば、ほうべんをまはし、ゆめになりとも見せ候べし、なをくはしく御見せ候は、いれいするもの候へば、御よひ候て御見せ候へと、あまりにわびさせたまふによりて、なんぢをよびてあり、ほうぢやうのだいくわんなり、よくく見よとのたまいて、そうじてにんげんのもとも、あくごうはかりをほんとして、ぜんごんにうとき事あさましくて、ぎやくしゆといふいまにはじめず、とりたてんするものさらになし、ぐちけんどのぼんぶをたすけんためのはうべんなり、これをよくいひつけて、いやしき物どもを、むらなくけちゑんせんと思ひて、なんぢをよびてあり、わがいはんずる事お、つぶさにかたりて、さいけ、しゆつけ、いやしきこつじき、こつがいにななりとも、此ぎやくしゆにすゝむべし、一にんしてするぜんごんは、けちゑんすくなし、たかきいやしきおしなへて、上下をいはてすゝむべし、そふじて上下といふ事は、にんげんばかりのしやうなり、つみによりてわろきさきもちごくがきだうなんにおつ、いやしきこつじきこつがいにも、つみなくはじやうぶつ、うたがいあるまじ、なにをつけてもにんげんの物とも、ものにうたがいをなす、くちおしき事なり、かやうのぎや

くしゆをも、みなうたがふ、これより物いりたる佛事にだに、さうなくうかふともきかず、これほとこのとにてなにかうかまんといふ物あり、六だうのゑを見てもおどろかず、かやうにぐちけんどんならん物を、なをつよくすゝむべし、かやうにいやくかなはぬ物おすゝめんためなり、ぶんざいにしたがいていくらもいるべし、つみふかきものは二と三にてはきくまじ、五と十どもすゝむべし、それをきかずば、あくだうのすもりとおもふへし、此ぎやくしゆはふどうゆめにつげさせ給へは、やかてこの五日にとりたて、さけをとゝめ、ほけきやうをよみたるありかたき大ぜんこんなり、そのきやくしゆにいりたるにんじゆ一にん一ももらさず、こかねのふたにしるしたりと、ふだおひらきて見せ給ふ、よく見てかたれとおほせ候、ありかたたくとく候、なをくをうくるものどもを見せんとおほせあり、千わうの御まゑ一ちやうばかりひきのけて、ひろきぶたいのやうなるところあり、そのうへにそう、ほうし、あま、おんな、おとこ、おさあ(な)い物とも干にんばかりあつまりたり、又そのそばを見れば、むま、うし、いぬ、ちくろい、てうるい、つばさあり、うじやうにいたるまで、にんげんにむまるゝ物これになしといふ事なし、そうじて一さいうじやう、ゑんまのちやうにもるゝ事なし、ひんがしのかたにほとけたち御いり候、きたのかたにはおに共、くものこをちらしたるとくはしりまいるなり、なをきたにじやうはりのかゝみあり、たいさんを見るごとくなり、これにむかへはつみもくどくも、つゆほとゝかくれなしいぶたいのやうなるところにあつまりたるものを、ゑんまのふだにまかせて、それよりかゝみのまへにひきむくる、つゆばかりの事もかくれなし、きたのはうにはをにどもあつまり、つみにまかせてめんくゝにうけとりくゝさへなみ、がき

註(か)は原

「まいる」は「まはる」なるべし

(ゆ)原註

だう、ちくしやうだうへとりてゆくもあり、しゆらだうへとりてゆくもあり、さまくゝの地ごくへとりてゆく、さけびつるゝこゑくゝに、くやしやぜんごんをばせずして、つみばかりつくりけるぞやとて、こうくわいすることかぎりなし、むまうしのかたちなるおに、くるまをひきてきたり、上下いろくゝの物とも廿人ばかりとりてゆくを見れば、ひのほむらびたゞしくもへあがり、うしのほふるこゑもほむらなり、火のくるまとは是なり、このくるまにのりてゆくものは、十あく五ぎやくのものどもにて、むけんへとりておゝとすなり、おちてのちは大ぜんごんをしてとふらへどもうくる事なし、なんまんどうへてか、うかはんとのたまひ候、又あをきおにあかきおに、くびかせかけ、なわをつけ、さへなみゆき候は、がきだう、ちくしやうだうへおつるものなり、こをかなしみ、いのちおおしみてしに候物が、此くびかせをかける候、これにたいてんなくとふらはゞ卅三年にはじやうぶつすべしとおほせ候、又うつくしきどうの見え候うちにほとけの御いり候らんとおもひて見候へは、おそろしげなるおにとも、人をしばり、うちさへなみ、さきにおつたて、此だうへ行候、うちよりとおあくるとのたえまより、ひのほむらけふりましりにはつといづ、はるかの上そまでほのおきたり候が、あつくくさき事かぎりなし、うちに人のこゑおめきさけぶおとかずをしらす、けふり一をたにもいださすこもりたる地こくなり、此地こくへはしんいおかすもの、むますめ、したにて人をしねかしなとゝいふものおつるなり、かまへてくちにても人をころし、いわん哉しんいをこかす事あるへからず、とふら(甲)いをもうけかたし、又俗人をしばりて、おにども四五にんよりて、ゆみをもち、やおはなち、おとこの身にあきまもなくやおいたて、やめよりくわゑんもえいつ、

おに四にんしてあしておとり、ひとりのおにひをたき候へは、此おとこをひのうへにひきはりあぶり、身よりあぶらおびたゝしくながれいづ、あげくにさかさまにふるへは、しゝむらはらゝとおち、ほねはかりになしてなげすてゝおけば、やゝありてのちもとのとくいきかへり候を、又さきのことくせめらるゝなり、これはしやばにてひゞにほうゑかけたる人をさんゝにつかいゝときのけんなればとて、しゆつけよりうへにいて、くつけいおし、神佛の物ともいはずとりつかいたるものなり、又といたに人をのせ、ばんじやくのいわおおしにかけ、おにともうへおおし候へは、身よりあふらおひたゝしくしほりとりてのち、いわをのけ、よきにてしゝむらをわりとり、へちゝになしてさへなみ候ものは、りつそらにて候か、五百かいをやぶり、大さけをのみ、あふらをほんとして物おくい、くわつけいばかりして、ごんぎやうをばいたさすぐるなり、そうじてしゆつけのよきじきをくらはあさましきつみなり、又むまうしのかたちなるおに、おほきなるからすきを人につけ、十はうへなわをつけ、はやひけとてうちたゝく、ひかんとすれともおもくて一あしもえひかず、おにはらをたて、なおつよくせむれば、めくちよりくれないのちゝおし、はをそめたるものにはくろかねのゆをのませければ、身のうちもえこかる、さけも此くあり、又おに人のかしらをふまへてまなこにあかゝねのはりをうちたつるあり、これはしやはにてかゝみを見るたひにみめのわろきおかなしみ、なきさまをまうけんと身をかざり、のちの世の事はかなしまで、ふるまいたるものなり、そうじてかゝみを見るたひに、としよりゆくさきのちかつくをかなしみ、ぼだいをねかはんためのかゝみなり、さはなくしてつみはかりたしなみ、ねつぶつ念佛をも申さす、あさましきありさまなり、又人

ちの下、
意つゝか
ず一枚
落したと
思はる。

(よ)アト
カキ

のめをくらまかして物をと、人のなんを見いたさんとし、佛おわろく見なし、ころもけさかけたる人もひお見わたし、よろづまなこにてつみをつくる物なりとて、かふべをふまへて、あかゝねのは一さみにてまなこおぬきいたし候なり、又くちにてよろづなきをいひ、ほとけをもきやうおもせしり、びくをそしり、三寸のしたにておゝくのつみをいひしものなりとて、したをなくひきいだし、さんゝにひきひらげて、まはりにくいをうち、むまうしにてすきかゑす、むしけらとりつきくいさすありさま中ゝ申もおろかなり、又山のいき物、かわのものあけくれころし、おやおしむかいをと、せつしやうしたるものとて、かわをさかさまにはきて、くしにさしてひにあふるなり、又人のいへにひをさしたる物なりとて、十ぢやうばかりのくろかねのすにまきて、おにともあふらをしほりとする事、中ゝめもあてられず、これはさたかねなり、物なり、なき事をいひいだし、しゆうにつけ、まとはかし、おふせぬ物をこいとりゝりひをもわきまへさるさたこのみのものなり、七すちのなわをつけ、ひきあをのけて、くちなわのとへせめいるは、身のうちへいり、ほむらとなりもえこがす、これはわか身をほめ、人をはわろくいひなき事おいひつけて人をころしたるものなり、又しゆつけにてありしが、かみをつゝみ、さ伊けのすかたになりたるものとして、くろかねのはさみにて、かしらをしゝむらともにはさみすつる也、さてぶたいのやうなところに、おゝかりし人とも、あなたこなたにとりゆくほとに、のこりすくなくなり、こゝ廿にんばかりいたり、ぜんそう、りつそう、じやうだう、ねつぶつ、しやうにうだうなどあり、此人々なげきかなしむ、われもごくそつのでにこそわたらんすらんとかなしめは、えんまより、なんちは心やすくおもゝゑ、

千そうまんそうくやうし、あるいはおやのぶつじをよくし、しのとふらいねんごろにし、ぎやくしゆをと
げ、おほきなるかわにふねをうかべ、こかわにはしをわたし、だうたうたて、ほとけおつくる大ぜんこん
の物ともなり、なからんつみにはおとすまじ、七さいよりうちの見とりごと、おなしほとけたちに身をま
かせて、いつくにも候へ、いまじやうぶつする事はあるまじとて、ゆるし給ふ、かやうにおそろしき事と
も見きゝ候ところへ、くろき御ころもけさのすそひらゝと見え候ほとに、いかなるそう哉らんとおもひ、
見あげまいらせ候へは、人みたけあはせたるほとに御見え候、ゑんまにて御いり候ちうゝの上へ御あか
り候、御かほを見まいらせ候へは、わかつてらの十一めんにて御いり候、ありかたくうれしくちからつき、
たつとさ中ゝたとゝゑんかたもなし、ゑんまのだいざに御いり候て、おほせ候やう、此けいしんを是ゑ
めされ候て、あとのさはぎ申はかりなし、わがまへにて百万べんりしゆぶんなんどよ見、桑原のしやうは
ん、こまのだんをたて、けいしんばうしゝ候はゝ、満さんぜずしてごまだんをやぶり候はん、しかるべ
くはかへしてたまはり候へとて、さんてんをもみ、こまたくありさま御らんじ候て、とく御かへし候へ、
じこくうつり候はゝ、もどりぐるしく候、此まましには候はゝ、あまりにふびんに候、しかるへくはい
そき御かへし候へとて、なみだをはらゝと御なかし候ておほせ候へは、ありかたさ中ゝ申もおろかな
り、又ふとうおほせ候、われもこれへまいる事へちのしさい候はず、此ものわれをしんすること、此三月
より大事にしやけおやみ候しとき、われをしんじてきせいしゝこまをたかせ、いろゝゝにかんたんをくた
き、いのりしゆへに、ふびんに思ひ候、われもせいり儀をいたし、かいふんいまゝでまもり候なり、すて

さん(原)

がき(さ)あさ

に四月にひほうのしにをせんするものにて候しかとも、ほんぞんわれゝたすけて候、是へのみちにまよ
ひ候ほとにきてまいりたり、六だうをも見せたう候へとて、せめて三日之とらうなくてはかなふまじ、
いそき御もどし候へ、ひつしのときすき候はゝ、えもどり候まじとおほせ候へば、ゑんま、われもとゝめ
んとはおもはず、まいにちをこたらすきやうおよみ、われにくるゝたんなにて候、そのゆへはういくなふ
するありさま見せんため也、いそきかへし候べしとて、いま見せつるとありのまゝかたるべし、ほうちや
うへ申候へとて、ゑんまおほせ候、やがてこれへよび申ゝさんとせしかとも、だいくわんに此ものをよび、
くわしく見せたり、本尊のみやうりよにかなひ給へるによつて、かほとはしめし申なり、いまよりしてじ
ひしんふかく、とんよくの心もち給ふな、一しんをばよくおさめ給へり、こんきやうにもおこたりなし、
たてきりたる人なり、わががらんでしをばせいたうよくしたまへ、みなおほやうにてすぎたまはゝ、ぐち
のつみにおち給ふへし、われ一にんとくほうするはくちにあさましきとなり、人をもらさすけふけし給へ、
おもひやりをしり給へ、ふるき佛たちいたはしきありさま也、あさ夕之ごんきやうをつとめ、花かうおそ
なへ、ふるきたうおこんりうし、かやうの事をいとなみ給へ、これすなはち御ためのせんごんなるべし、
上下をいはすぶつじおなし、けちゑんをほどこし給へ、らうせうふぢやうのならい、たゝにんげんおば
露のやとりと思ひ、よろづうちすて、ごしやうをほんとし給へ、かへすゝしゆつけの物づくり、あさま
しきつみにおつ、これやみ給へと申へし、さけつくとあさましきひか事なり、つくるたひに地こくいて
きてもゆるなり、大ぜんごんをなすこともさけをいだす物ならば、ほむらにもえあかり、しやうりやうと

もにもえうせ、すこしもうる事なし、そふしてさけはあさましきつみなる事なり、しゆつけか物をつくる事はせんする、こんきやうにひまなし、あけくれいそかしきふせいして、にんけんいかりいとなみ、のちの世をすてはて、ごしやうの事をさらにいとなます、くわうせん之たびにおもむかんととき、ゑんまのおもては、ごづめづに、つくれるつみはとくくあらはれ、しもんのふたにかきつけ、供生神くしやうじんにひきむけんときには、いかにしてかくるべき、ふせぐにもふせかれぬは、めいどのつかひなり、いつれのきやうもんにかしゆつけに物つくれとはとかれたる、ぶつせつにまかせて我かしゆうの事のみはけむべし、よのしゆうをそしり、わがしゆうをもへんしうする事、あさましきひが事なり、一世ならぬゑんにて、いつれのしゆうていにもなるなり、よくくしんをこし、念佛し、一たひなむとなへ、彌陀をねんぜんともからは、いんぜうさためうたかいなし、ほとけにはうとくして、にんげんばかりかしこくする物は、地ごくのくけん、寸のひまなくせめられ、とふらいをもうるこかたかるへし、かまへてくぎやくしゆうをすゝめて、のちに何にてもあれ、くやうをなすへし、ほうきよういんのたうおもきれ、ほとけをもつくれ、はしをもわたせ、ふるきだうたうをもこんりうせよ、ぶんざいにしたがいてくやうすへし、ぎやくしゆのとき、ときをもせよ、くやうなくはいたづら事なり、そうじてきたうにても、ぶつじにても、ふつふせをかくへからず、とふらいにはとさらふせかよくとき候なり、心あるものゝぜんごんは、海大かいにひとつふあめふりて、ふかきふちとなるがごし、心なき人のなすぜんごんは、大かいへいさごをいるがことし、しんじんをいたし、ごしやうをよくくねかふべし、露のやとりたかりそめのうき世なり、

「かたさ
しは」
「たさ」
「い」とす

よくくいとひ給ふべし、と申きかせまいらせ、なんぢも此ありさまよく見て、心たつとくして、よねんみやうもんじやけんとんよくの心ひきかへて、しんじんをこし、ひとへにあまねうばう一なとをけうけし、じひしんをもつて、いやしくあさましきぼんぶをりやくし給へ、十さい日とて月に十あり、その日一さいしゆしやうのいけるものゝつみくとくを、ほさつたち、十わうの中にてさんだんし、ぜんあくのふだにしろし給ふ、にんげんのつみにより、十わうのしんくたへかたさは、にんのくにもおとらす、あはれ一さいしゆしやう、くどくせんごんをし、ほとけになれかすとあんするに、つみはつもれどもぜんごんはなし、佛たちくちなるぼんぶをかなしみ給ふ事、おやのこをかなしむよりなをふかし、伯父なんぢがをうぢ伯父けい阿ぜんものちういんより、此ぎやくしゆおとりたて、心ざしをもつて人をむらなくすゝめ、さけをとめし大ぜんごんにて、けい阿地こくにおちんすれども、まん月に頓とんしやかきたりしくとくによりて、三あくだうのくをのかれたりしなり、此ぎやくしゆありかたきなり、此ぎやくしゆありかたきなり、又桑原のしやうはんにいふべし、もとはあくにんなれとも、心ひきかへて、千日のごま八千まいにいたるまてつみ、ふかきしやうりやうをはしめて、ほうかいとゑかふせしありかたきぜんごんにて、しやうはんか地こくみなやぶれたり、ぶつしんに心さしありて、たうたうをこんりうし、ごんきやうをほんとするものか、ふつしんのかごあるなり、いつれのしゆうでもせうくちかき候て、ざぜんをもせよ、こまをもたけ、わかしゆうくのとをいとなみ、心たつとくしてをこなへは、みな一々にごくらくへそのすかたうつり見え候と一ゑんまおほせ候、かまへてがまんの心もち給ふな、ふしんにぐちけんどんならんものを、

よくくけうけしたまへと、しやうはんのかたへ御ことつて候、又けんほうと申しきの御いり候に、ゑんま御とつて候、此夏中はきやうよみ給ひて、ぐちけんどんのぼつぶをたすけんとおもひたまいて、日にもいたつらにわたり候はん事、くちおしき事にて候、よねんたねんの心なく、ぶつせつにまかせてとき給へ、わか身一にんのとくほうするは、まんぼうぐちにあきらみ候なり、かまへてしゆしやうをむらなくけうけし給へ、あさましきぐちのぼんぶをすくわんための御身なり、すゝめくわんじんをもさせ給へ、それすなはち御ためのりやくなり、いまたにんげんの心たえたまはず、たゝ一ほうをまほり給へとけつほろに申せとて候、なをく此ぎやくしゆよくひろうして、七日くふせをかくへからず、此ぎやくしゆを卅三年をとけたらん人々は、七日くのほとけたちうけとりいんたうしたまふへし、くらきみちのさはりあるへからず、かやうの事ともたしかにおほせ候、又ふとう此ものいそぎ御かへし候へ、じこくうつりてはもどりくるしく候とおほせ候へは、ゑんまくわんきやうをはよみたるかと御とひ候、よみて候と申候へは、さらはにくのけをさづけんとの給ひ候て、御さづけ候なり、又ほうちやうへは御はんをあそはして候、さらはいそきかへれと、かみに御はん、けいしんはうひたいにも御はん御すへ候て、いそきかへれとおほせ候ところへ、おそろしけなるおに二にんきたり申やう、此ものはしやはのゑんもつきからたもやけて候はず、二しんよりさきにたちてひかことのものなり、いつくへ御もとし候はんずるぞといひて、まなこをいからかしてたちむかふ、おそろしさ心も身にそはず、ふとういそきかへれとおほせ候へとも、あまりにひさしくおそろしき事とも見き候に、身もいたくてたゝれず、ふとう御てをとりはたしひ

とつき、
とつきと
す傍書に正

き御たて候、うれしさ中く申もおろかなり、ふとう御つれ候てもとり候へは、みちすからよみかへりありとて、ことつてせんと、しやうりやうたち、われもくとたちいておよく候しなり、こなたへいそき候ほとに、とくはき候はず、いつれも御とふらいとくうけ申へし、心さしをもつて一へんなりともとい給ひ候へは、およくとつき候なりとおほせ候へ候、又五十あまりなるしやうたうむかいて、われはしめて二七日にもなり候はず、正かくしやなきたうのりしゆと申候ものなり、わかあとへ御つたへ候て給候へ、卅五日にかまへてさけをとめて、とんしやをかきてくれ候へ、にんげんに候しとき、くちけんどんに心をもち、わか物はなきよしにて人におしみ、わか身にもおしみ、とんよくの心にちうし候しにより、卅五日にがきだうのくをうけ候へし、とんしやにては此くをのかれ候はん、さけか候は、中くむやくにて候と御つたへ候て給候へ、とて見えたまはず、又たしまのおうちにて候とて、せんもんくりげなるむまにのりて御いり候しが、ふとうを見つけ給ひて、むまよりいそきあり、しんゑもんのかたへ申てくれよとて候、われあくごうのものにてありしかとも、たうしんをおこし、こやおきしこほりをてうつにつかい、よねんをすてねんふつをこたらず申候しゆへに、あくごうほんなうのつみにのかれて候、又それかしがちういんのうちに、ぎやくしゆをとりたて、さけをとめ、上下をきはすゝめ給へるくりきにより、大ぜんごんにて地こくにおちす、是しかなからしんゑもんのが心ざしなり、いきてのあつかい、しよてのとふらいうれしく候、いつれも心さしをもつてとふて給候へと申され候、又まこひまこにいたるまで、しゆつけになりてうれ敷候なり、又十四五ばかりなるちご、うちしほれてたちむかひ、御と

(を)原傍書

つて申たく候、われはたしまのあかのがこにて、な々はしゆんぢよと申、多なみのかうらいしに候しが、おもひよーらすとうじやくのてにかゝり、かつせんたうのくをうけかなしく候、二しんにさきたち候とてなけれ候か、ほむらとなり身にかゝり候と、二しんのかたへ御つたへ候て給候へ、かつせんのかうらいじのぼうすへも、此よしおほせをはとんしやにてはたすかり候へし、あにのみんぶきやうにも、かうらいじのぼうすへも、此よしおほせ候て給候へ、酒候は、中々むやくにて候、又てんわうしの大阿みたふと申人、心さしふかくとひて給候へは、とくつき候てうれしく候と御つたへ候て給候へとて、うちなみたくみなつかしけなるふせいにて、しはしたち候を見れば、あはせをはだぬき候か、むねのあたりよりちなかれ、かみもみたれ、ほけくとしたるありさまにて申すて候し也、又もりくちにてうたれ候していーたうさへもん三郎殿とて、おそろしげなるふせいにて、かみは見たれ、ちみどろにてたちをぬき、おにのやうにてたちいて、ぬきつれこし給ふところへ、あとよりかたきおつかけ、ひまもなきにつくへゆくそ、はやかへれとて、ぬきつれたるものともにせめかへされて、物をもいはてかへられて候、これはかつせんのみまはあれとも、ほうしかへりのつみにすんのひまなし、又たかつかひたるものかむけんへおちて候、あはたころしおきたるものともつといて、むくひのつみをせめ候なり、つかいたるたかはくろかねのとりとなりて、きもおつゝいて身のうちへせめいり、いろくせめせたけ候ありさま、中々たへんかたもなし、大ぜんごんをするとも、露一ほともうくるとなし、しやはにてことものつくるつみ、ことくおやのかたへとつきて、くげんひま候はす候、おやを地こくへひきおとせは、さいけはこほどうとましき物は候まし、いくたりとも

(一)原傍書

原傍書「つかはしめ」とす

しゆつけになしてくれ候へとみなとつてられ候、又とりをかいてしものをは、くろかねのろうのとくとりこをくみて、そのうちにかいつる人をおしこめて、身もはたらかぬほとつまりたるなかに、おびたくしくほむらもへあかる、をめきつるゝこゑたとへんかたなし、みやうくわんみやうしゆと申は、地こくくらくのあいたにてつかし給ふなり、又ひじりおとしたる物はさかさまにたて、をかのこきりと哉らんにてひきわるなり、しやうりやうたちあしたはま一つみつむけてくれ候へ、むけ候はぬはみつはあれともゑのます候、日りやうくなとむけんとき、人にくわせんなとよろつにおもひあてゝむけ候は、一つふもうくる事なし、あくるまであつかり物にて候ほとに、まほの候へは中々しんくにて候、かなしく候、たゝむゑんにかなしきひしりにまいらせて候物は、よくくゝとゞき候なり、又はかたのおふちにもあひて候、うれしやとつてせんとてよろこひ、京のひかし山のひしやもんたにの十りんいんのくないきやうのそうつに申候へとて、われにんけん候しときは、おほやうなるらんといひつれとも、いまはたつとくおこないすまして、二しんをよくとふらいて給候へはうれしく候、とんしやをかきて給候へ、それにてはしやうふつし候へしと申せとて、まこともしゆつけになりて、うれしくこそ候へとて、かへり給ひて候、又七十はかりなる御ししゆうの、こしかゝみてたちむかひ、われはくわはらのしうとのゝをはにて候、くちにあさましきものにて候しかとも、まつこのとき、しう殿、山のちうきと二にんして、ねんふつよく御すゝめ候て、りんしうのとき、りんしうしすましてうれしく候、よくくゝとふて給候へと御とつて候、又六十はかりなるしやうたうの、われもしうとのへとつて申たく候、ねくろにてつみふかきしにして候も

のなり、此たひのきやくしゆに御いれ候て、ありかたく候、千日こま八千まいにいたるまで、ほうかいと
 ゑかうあそはし候くりきに、みなうらうかひて候、ありかたき御事うれしく候とて、見たたまひ候はず
 候、こととうほうたちにもあいまいらせて候へとも、大かたくわしからず候、こなたへもとり候とうりう
 に、みちにてとつとどき候あいたはかりにて、ふとうはこれよりもとれとて御たち候、おもひ候へはは
 やしやはになりて候、心いてきてのちはあしもはれ、たちいもせられ候はず、四五日は心も身にそはず、
 おそろしく身もいたくなく候しなり、又うみなかしの地こくを見候へは、ちのふちにしつみ、くひは
 かりあかりて、にんたいも見えず、くらくくとにかへり候なかに、人おほくうふこをいたき、物をとも
 きこえず、にえ候なかり人いて候、ことつてせんすると候か、とんしやにてたすかり候へしと、おや
 のかたへ申て給候へとて、もとのかたへかへりて候、又人といさかいをせんものは、をんなにても候へ、
 かつせんたうのくをうけ候なり、これを見ん人々、ねんぶつよくく御申あるへく候、なに事もしひしん
 に、こゝろをもち候て、いかにこしやうを大事とねかふべし、これまてにて候、

(紙別)

三か日ありてよみかへり、ゑんまの御つけのこときやくしゆをすゝめ、三かねんすき候、十月十五日に
 ふつてんにてつとめ候おりふし、ほんその御まへのとほりに、あをきくもて候を、ほうちやうおほせ候
 は、けいしんはうとられ候へと候ほとに、たちよりとりて候へは、そのてさらくひらけす、そのまゝ心

原「さか
 り」とあ
 るを「く
 も」と訂
 正せり、

是は「く
 もさかり
 し」なるべ
 ず、意通

とをくなりて候を、みな人おとろき、まつておひらき見んとせられ候へとも、そうしてひらかれす候に、
 みやのこんけん、かんなきに御たくせん候やうは、さきのたひ、此けいしんはうをゑんまくうへめされ候
 しかとも、ちやうこうにて候はねは、もとし給ひ候、しかるを人々まことなき事といふものおほきゆへに、
 いまかさねてわれつれてゆくなりとて、ゑんまくうへまいり候へは、さきのたひよひつれとも、ちやう
 こうならねはかへせしなり、その地わかをしへ候とく、きやくしゆをすゝめ、せんこんをなす、ありかた
 し、しかるに人うたかいをなす、さきにひたいにはんをすへしか、うすくなりて見えず、いまなんちかて
 のうちにはんをおすなり、これをはんにひらきて、人にあたへ候へとて、おし給ひ候、さてその日のしよ
 やとぎに、いきをつき、きをとりなをし、てをひらき候へは、あおき御しやりひかりをはなちまし候、
 あくるとしきやくしゆのくやうに、千輻のきやうよみ候事十日にて候、そのあいたのしやりをいたし、み
 な人にけちゑんさせ申候、八日にあたり候日、きやくそう一にんきたり候て、此てらにはゑんまわうをあ
 かめられ候はんするに、御いりなく候、われつくり候てまいらせ候はんとて、みそきをたつね候へは、お
 しろとにみそきになるへき木候、きやくそうこたな一にて、あしたよりゆふべにいたり、つくりたてら
 れ候、みな人きとくの思ひをなし候に、きやくそうはそのまゝかきたえ見えられす候ほとに、これはゑん
 まわうけんし給ひ、われと御つくりありとて、かつかう申なり、さて手のうちのいんはんをは、月ほうと
 いふ地しきに見せ申され、はんにひらきて人にあたへけり、

此さうしはよみかへりのち、見きし事をありのまゝみつからかきを給ひしか、一らんにとりうしな

い候ほとに、かのみかへりのゆかりのものにて候へは、かき候てまいらせ候なり、此本ふそくのあいた、かき一なをし候てまいらせ候はん心中候ほとに、これおはこなたにとよめ候、
 永正十年八月廿二日に、てんわうしひかしそうはうの中坊において、かきうつしおはんぬ、ひらき見ん人々は、一へんの御ゑかうにあつかるへく候、

法印

政思

永享十一年より永正十年まで七十五年になり候ほとに、愚僧六歳のときにあたり候、此慶心のはうに、しつかいやしないそたてられ候しかとも、そのおんをわすれ候て、くちおしく候、十月一日命日候、

長寶寺よみかへりの草紙 終

昭和六年六月二十五日印刷
 昭和六年六月三十日發行

【非賣品】

大阪市住吉區

發行者 平野郷公益會

會長 吉村音次郎

京都市下京區猪熊通七條南入

印刷者 石井喜太郎

京都市下京區猪熊通七條南入

印刷所 國文社印刷所

發行所

大阪市住吉區平野郷公益會

Zf. 4H-12





